

【翻 訳】

## 社会科学におけるメカニズム的説明の論理

ミヒャエル シュミット 著

久 慈 利 武 訳

### 問題の所在

本稿は、社会科学のための説明的で実在的なりサーチプログラムに賛成して、若干の哲学的論議（Bunge 2004 ; Little 1998）と社会学的論議（Hedsröm 2005 ; Manicas 2006）をともにひきあいにする。以下で明らかになるように、そのようなプログラムは、社会科学的説明が個人行為の実質理論に依拠したマクロな事態についてのミクロに基礎をおいた多水準の説明の形式で述べられる。

### 1. 科学的説明の論理

私の主題の背景は、社会科学は一連の適合条件を充足できる説明だけを成功を取めたものと呼ぶことが出来ると提案したときの Carl Hempel によって描かれている（Hempel 1965 : 247ff.）<sup>1</sup>。これらの中には、被説明項が説明項から論理的に演繹されること、説明項が少なくとも一つの演繹に必要な法則定立的命題ないし法則を含むこと、説明議論の命題は経験的に確認されうるものであること、説明項の命題は真でなければならないこと、が含まれる。

この説明スキームに対して、社会諸科学が Hempel が擁護する類の説明を提供できる能力を次第に否定するきわめて多様な批判が持ち出された（Bayertz 1980）。最も重要な批判には、一般法則の立言は説明成功の必要条件ではなく、むしろ人間行為の科学では特に、社会的出来事の説明の追求は歴史的、局所的に有効な個々の原因（Mayntz 2002）、ないしは行為のはっきりとした進行を行為者に開始させることが出来た非因果的理由（Louch 1966）に突き当たるときに、結論づけられると見なされる。この批判に関連して、もっとも遠くに到達した異

---

<sup>1</sup> ヘンベルは社会科学にレリバントな3つの説明形式を論じた。機能主義的ないしシステムの説明、生成的（歴史的）説明、個人行為の合理的説明。もちろんこのアプローチがなくても互いに結びつけられる。Braithwaite, Popper, Carnap, Nagel は社会科学哲学の議論に様々な範囲で影響を及ぼしたパラレルな、ほとんど完成をみなかった解明提案を提出した。このテーマに関するいっそう前進した文献は見あたらない。近年の総合に Kuipers (2000, 2001)

議は「妥当な説明は議論を構成せず、したがって説明項と被説明項の論理的演繹のつながりを要求しない。従って、プラグマテックな説明 (Bromberger 1966), ノーマティブな説明 (Dray 1957), ナラティブな説明 (Danto 1965), プラクティカルな説明 (Wright 1971) が認められる必要がある。」上記のすべての批判は正統派の反論に対決された。それは科学的説明の論理を巡る数十年にわたる論争が結論を下すことなく終わったという印象を強く残した。何が間違っていたのか。

この質問に答えるためには、我々は次の二つの点を受け入れねばならない。

- (1) 我々が社会科学的説明の可能性に執着したい限り、その演繹的性格は放棄されるべきでない。というのは、社会的事態を描写する命題を説明項から論理的に演繹することによって、我々は社会的事態を実際に説明しているから。
- (2) そのような説明の妥当性を判定するために、我々は何の要因が究極的に当該の出来事を生成するかを指摘する法則を必要とする (Bunge 1979)<sup>2</sup>。

私だけが想定しているのではないが、もし社会科学分析の任務がマクロな構造上の分布、行為の集合的結果、組織と関係の形態、行為システムの働き、要するに集合現象の説明にあるならば、その助けを借りて、我々がそのようなマクロな被説明項の命題を演繹することが出来る法則とはどんなものかという問いを提起しなければならない。

この問いに対する予想される回答は次のように分類される。ある者は、マクロな過程の歴史的進行を支配する社会法則を追求し、社会の発展法則、運動法則、変換・移行法則を発見する、あるいは少なくとも社会構造の均衡条件を同定することに成功したときにのみ、説明的社会科学は生じることが出来るという考えに執着する。これに対しては、純粋に論理的理由から (Popper 1961: v) か、あるいはすべての候補は絶えず経験的に虚偽であることが証明されてきているから (Schmid 2006: 12f., 139ff.), そのような構造法則、過程法則をこれまで発見できたものは一人もいないと語られる。理論家はそのような法則を探求し続けたいために、上記の結果を無視することを好まなかったとすれば (McIntyre 1996), 二つの応答が可能である。

- (1) 社会法則の探求を放棄し、個人行為の法則に限定する。このアプローチのもっとも著名なバージョンは行動社会学で、それによればマクロ現象は個人行為に還元され

<sup>2</sup> 因果過程が意図的行為者によってうまく操縦されうるかどうかは、「因果性」概念の適切な理解にとってはきわめて二次的なものである。

ブンゲ (1987) によれば、ここに因果性の本質がある。経験主義科学理論はヒュームに追隨してこの見解を長期にわたって形而上学的なものとして忌避してきた。それによれば出来事の産出は何らかのエネルギーの放出に依存しなければならないという伝染 (伝達) 因果性に関しては、近年 Kistler (2000, 2006) が信奉している。残念なことに、今までこの仕事を知らなかった。そのためこれがたとえ明白となっても Schmid (2006) では考察できなかった。

(Homans 1974), 構造による行為を方向付ける影響力は否定され, そのような構造は個人行為者の行為からどのようにして生じるかに照射することは放置される。社会システムの行動を説明するという従来のマクロ社会学の正当な関心事は次第に見失われてきた。

- (2) そのような個人行為の法則の探求, 任意の描写のすべての法則定立的連結の探求を放棄し, 社会科学は説明という任務を全く持たず, 理解という没説明的方法に専念し, 記述的概念の構築とその助けを借りて, 生み出された社会過程の類型化に自己限定する。

もし我々が社会学に関する限り Robert K. Merton とその弟子たち<sup>3</sup>にまでさかのぼる仲裁案, 調停案に従うならば, 社会科学の説明プログラムのこの自滅から脱出できるというのが私の信じるものである。私は社会科学におけるミクロに基盤をおく説明という題で論じたい, この提案の系統的な再構成に自己限定するつもりである。

## 2. 社会科学におけるミクロに基盤をおく説明

私の考えでは, すべてのミクロに基盤をおく説明営為は次の対決によって特徴づけられる。一方では, 概念の帝国システムに基づいて社会過程法則のすべてを述べる事が出来るというすべてを包摂する社会理論が存在するという信念は, そのような法則が一切存在しないという理由で実現が困難である。他方では, 還元的に応用された行動理論に依拠することは, 社会現象の創発性と独自性を説明するには不十分である。なぜならそのような理論の持つ法則は構造的述語を含んでおらず, それゆえ社会関係には何も語らないからである。そのような現象を説明するためには, われわれはむしろ, Merton のいう, 人々の社会的相互関係の分析 (Merton 1964: 56) を必要とする。そこでは, そのような関係の働きと帰結が構造的に先駆けて形成された代替行為の間から選択しなければならない目標に定位し意図に先導された行為者 (Stinchcombe 1975) の行為のしばしば意図されていなかった集合的産物として把握されるべきである。

そのような説明指針はもし次の仮定が充足されうるならば実り多いものとなりうる。まず

<sup>3</sup> それには, とりわけ Stinchcombe, Coleman, Lindenberg, Hedstrom そしてやや間接的だが Boudon を枚挙したい。Schmid (2006) では, わたしは Stinchcombe を取り上げなかったが, そのかわりに少なくとも簡単にでも Merton を引き合いに出している Fararo, Mayntz, Esser を取り上げた。Roy Bhasker に続いて Margaret Archer まで招集される批判的リアリスト集団もまたメカニズムの探求に関心を寄せている。Giddens と Burdieu もメカニズムについて語っている。しかし, この最後に挙げた著者達全員はメカニズム的説明の科学的分析を放棄している。メカニズム的説明の解明のはっきり取り組んでいるもう一つの系譜は Harre/Secord の著作にまで遡る (それに関して Manicas 2006)。

各行為者の個々の行為は選択の帰結として説明されることが確認されねばならない。これは行為者が自分の設定した目標と主観的情報に照らして、自己の行為に関する決定にどのようにして到達するかを知っていることを意味する。そのような個人選択理論のアプローチは様々な道筋に沿って可能である。大半の著者によって擁護される理論は、選択の最も重要な要素として、自己の資源を聡明に、創造的に使用する、ターゲット状態を予想し評価する、彼の考慮の可能な限り最善ないし最も費用効率の高い結果と見なされている選択肢の少なくとも一つを同定する意思決定アルゴリズムに依拠することが出来る行為者の能力を特定している。かくしてそのような理論のコアは彼の知覚された多様に評価された可能性と制約に照らして、自己の行為の企画と実行にそれらをどのように適用するかを知っていて、意思決定に関わる能力を持っている行為者である<sup>4</sup>。

しかしながら、ご承知のように、社会科学の説明の対象は個人行為者の個々の行為でなく、社会的事態、集合現象である。私の見解では、社会科学的説明の論理的性質と実質的目標の議論は、これまでは様々な理論の上記概念の多義的な使用によって悩まされてきた。「集合事実」によって相互行為的に思念する理論家 (Boudon 1979) は、まず分業の結果として、

<sup>4</sup> RREEMM 意思決定論 (Lindenberg 1985), 価値・期待理論 (効用・確率理論) (Esser 1993), 合理的選択理論 (Becker 1976), 拘束的な合理的行為の様々の理論 (Simon 1983), 認知不協和の理論 (Kuran 1998), 学習 (Homans 1974), プロスペクト理論 (Kahneman/ Tversky 1979), フレーム選択の理論 (Esser 2003), 十分な理由理論 (Boudon 2003), 民俗心理 (Balog 1989), 願望と信念と機会によって導かれた行為論 (Hedstrom 2005) は、比較可能で、論理的に両立可能な説明提案を提出している。(独語版) Merton は有意味の行為の理論の非常に一般的な基礎に自己限定した。その再構成に関して、Schmid (1998: 71ff) 参照。価値・期待理論 (効用・確率理論) (Esser 1991, 1993), 新古典派経済学の効用理論ないし合理的選択理論 (Becker 1976), 制約された情報の合理的行為の様々の理論 (Hempel 1968, Sen 2002, Simon 1983), RREEMM 論 (Lindenberg 1985), 認知不協和の理論 (Kuran 1998), 学習理論 (Homans 1974), プロスペクト理論 (Kahneman/ Tversky 1979), フレーム選択の理論 (Esser 2003), 情動最適化理論 (Collins 2004), 十分な理由理論 (Boudon 2003), 願望と信念と機会によって導かれた行為論 (Hedström 2005), 動機づけられた行為の理論 (Balog 1989, 2006), 適応的行為の理論 (Gigerenzer 2000), 心理分析 (Alexander 1968; Schulein 1999), 社会生物学に下敷きをおく行為理論 (Buhl 1982; Sanderson 2001) も接合可能、連結可能、統合可能な提案を提出している。しかしそれはこの挙示物の相対的な説明能力の確定的で他に譲れない探求を欠いている。初期的だがシンボリックな表現行動と合理的行為の関連に取り組みものに、Malewski (1967), Schmid (1993), Mark (2001), Etzrodt (2001, 2003), Wolf (2005), Chong (2000), Schußler (2000) がある。私自身はマートンに倣って一つの意思決定論を優先する。なぜならこれはどんな条件下で行為者が何をなすかを挙示する明確に定式化された選択関数を手にするからである。そのような選択関数が欠如しているところでは、現象学的理論や人類学的理論は通常はマクロな説明のミクロな基礎付けには適さない。他方で、プラクシス理論 (Reckwitz 2003) やブルデューのハビトゥス理論は、行為者の意思決定条件が変化しない仮定の下でのみ行為を説明できる (Bourdieu 1979: 139ff.)。それは、行為者が彼のこれまでの意思決定戦略を否認することを放棄する限りで共有されうる一般的意思決定論の Eckklosung として扱うことが明白となる。この思想系譜は行為者の背後の潜在能力と意識以前の与件の探求ほどには興味を引かない。それに対して、人はプラグマティックな行為理論 (Jonas/Beckert 2001) がするような行為の創造性に力点を置く。行為者が未定か不確定な行為結果を許容することが出来ると信じている条件下でそれが行為を説明するときに、彼はその意思決定論に従うことが出来る。恒常的な嗜好を使って仕事をしたいと望む意思決定論 (Becker 1982: 3ff) は革新的な意思決定を把握できず、その代わりに行動の変更を状況制約の変化に還元することが出来る。上記の多様な投入条件を適切に判定できるには、様々の理論群提唱者が彼が自分の説明試みにどの仮定を敷いているかを正確に挙示することができる時に助けとなる。反対に、それがそれとともに獲得された演繹が確認される限り、その選択に対するすべての批判は無用となる。

行為者が少なくとも二つの形態をとりうる相互依存した関係に入らねばならないことを意味した。第一のケースでは、行為者は他者の行為を観察し、自分の行為をそれに合わせることに自己限定する。彼らが自己利益的仕方で行う行為する紛れもない権利を保有するところでは潜在的に仮定されている。第二のケースでは、行為者はこの権利を付与されず、他者の行動チャレンジを考慮に入れることを余儀なくされる。万一彼らが自分の共同行為者の利害を無視するならば、介入を予想しなければならない。行為志向の両形態の含意は、行為者が権利、規範のお互いの承認によって自分たちの関係を構築し方向付ける点である。従って我々は社会現象は第一に規制された形態の関係を意味することを推論するかもしれない (Coleman 1990)。他方で、彼らの相互依存し規制された行為の集合的帰結ないし構造効果 (Blau 1977: 144ff.)、合成効果 (Boudon 1977: 271; Boudon 1986: 56ff.)、その創発的分布特性 (Sawyer 2005) もまた社会的事実と呼ばれる。特に構造理論家が自分たちの注意をこれらの効果が個人行為者とは独立にどのようにして獲得されたか (Blau 1994)、これらが複数の意図的で自己利害的な行為者の個々の行為からどのようにして生じるか (Wippler 1978) に注意を向けるときに念頭に置いているのはこの種の社会的事実である。両種の社会現象 (相互依存と分配効果) が行為において決定的な役割を果たしている事実を承認する際に、我々は、一つの役立つ社会科学の説明モデルが意図に先導された個人行為の意図されざる、時には思いがけない集合的帰結として両種の効果を理解させるよう配慮しなければならない<sup>5</sup>。

これまでの考察は社会科学的説明論議のロジックをあぶり出すには十分であるように思う。個人のルールに定位した行為の帰結を何らかの種類 of 行為理論から直接導出することを許す一水準の包摂としてそのような説明を我々が見なすことができないことが次第に明らかになるであろう。その代わりに、区別される4つの説明ステップが存在すると仮定すべきである。第一ステップは、それを用いて、彼らが自己の状況を知覚評価する、生来的、獲得的、遺伝的な能力に依拠して、個人行為者の行為を説明する。任意の行為の成否は個々の行為者が直面する可能性と制約に左右される。これらの機会を同定するために、我々は任意の行為の成功の条件に二つの側面があることを考慮しなければならない。一方で、自分たちの行為を組織しプロジェクトするために、行為者は自分たちの意思決定問題を秤にかけるときに不問のデータと見なすことが出来る物的資源をひき出すことができなければならない。彼らの原則として予測し得ない共同行為者が彼らのプランを邪魔しないまでも共同で条件付けるこ

<sup>5</sup> この関連で次の二つの疑問が生じる。ひとつは、構造理論家はその注意をこの意図されていないが望んでもいないし予想してもいなかった結果が多数の自己に有意義に行動する行為者からいかにして生じるか (それに関して、Wippler 1978a, 1978b)。他方、行為者の価値志向、期待志向を特別に注視することなく、この構造の固有の権力構造が説明されうる (それに関して、Blau 1977, 1994)。この二つの問いの回答は矛盾に導いてはならない。私は行為者の行為に遡らないで構造力学の働きが説明されうるということにだけ異議を唱えたい。

とが出来てを心にとめることを余儀なくされる時に、一瞬任意の確実性は失われる。別の言い方をすれば、他者の行為は、各行為者が自分の意思決定の際に含めねばならない主要な機会の一つである。この仕方では実現されるすべての社会的行為はゲーム理論家が提案する戦略的行為として理解されよう。その場合、我々は予想によって先導された直接の相互行為、ないしそれらが産出したのかもしれない外部性によって行為者が互いと意思疎通しているかどうか、影響力を行使しているかどうかは未定のままである。

彼らの行為の相互依存のこの承認は、説明の第二ステップの是認と不可避性がそれにかかっているため重要である。このステップは、再生産可能な行為配置が生じ流布することが出来るように多様な個々の行為者がいかにして彼らの行為を互いに結びつけるのを確定することにある。広く論議された提案ををたどりながら、我々はこれらの連結過程を社会的メカニズムと呼ぶことが出来る。そのメカニズムは一定の前提で分析される。まず我々はそのようなメカニズムが多様なことを知らねばならない。次にそれらへの需要と成功のチャンスは行為者が彼らの相互利益を戦略状況の中で調整しようとする際に直面する問題の強さと性質に左右されることを知らねばならない<sup>6</sup>。相互の行為調整の問題ないし相互に依存しあつた決定を調和させる問題（Ullman-Margalit 1977: 82）と見なされるものの要求される定義を提供する際に、我々は個人行為を機会に条件付けられ、意図に先導された最良のリターンに関心のある行為として説明する行為理論なしで済ますことは出来ないことがかなり明白になったと私は信じている。換言すれば、行為者が他者との調整（coordination）、協力（cooperation）、対立（conflict）に特定の仕方では賛成ないし反対の決定を下すときに、行為者が直面するのはどんなポジティブ、ネガティブな集合帰結か発見できるのは、行為理論に照らしてのみである。この文脈で、多くの著者達<sup>7</sup>は戦略的相互依存状況で合理的、自己利害的行為者が会おう利得配置の明確な定義を提供するのにふさわしいのはゲーム理論であると信じている。応酬するようにインターロックしたそのような行為のオプションの詳細な状況論理の分析ほど、観察される行為者が彼らの目的と予想の反目しあう非両立性のせいで敗北を受け入れねばならない配置に、繰り返し会おう覚悟をすべきである。それは一つには日和見と欺きを被りやすいことが共通の利益の最適な確保と分配の達成を妨げるためであり、一つには行為者が彼らが争わないほどお互いに利益になる報酬に目配りするときでさえ、時として許容できない開始費用と取引費用が生じるためである。

行為者が自分が直面していると見なすコスト構造の正確な確定は、彼らがある形態のメカニズムを設置し維持することに従事したいという願望にとってはほんの一つの必要条件にす

<sup>6</sup> Ullmann-Margalit (1977) は調整、協力、不平等の問題を区別している。

<sup>7</sup> Esser 2000a: 27ff; Little 1991: 151ff.; Mayntz 2004.

ぎない。等しく重要なのは、彼らを仲間（共同行為者）と関わりを持つようにさせる動機付け理由を活性化することができるかどうかである。ここでは比較的変化しない基礎的要求の他に、いくつかの影響因子がある役割を果たしている。とりわけ、彼らが他者の利益に配慮する決心をしたときに、その行為者が手に入れるのはどんな種類の報酬かが重要である。これとともに我々は、行為者が行為の相互調整を払った結果私的財ないし集合財を期待するかどうか、これらの財が難なく共有されうるか、それとも競合的消費にさらされるか、財の性質がどの程度チェックされたり、予見されるか、そのような財の使用権が全面的にかほんの一部だけが譲渡されるか等の後続する問いが持ち出される。さらに我々は行為者が手に出来る権利、所有物の当初の配当を知らねばならない。流布している権力の不平等、分配利害の違いを考えると、すべての参加行為者がいずれの配当にも満足すると仮定するのは素朴である。すなわち、そのような関係のいずれのモデル化もサブオプチマル（非最適）な分配結果とそれに対応した批判と見直しを考慮すべきである。

上記の憶測が明確化されると、社会分析家は特定の規制に関連したメカニズムが流布するかどうか、どれだけの成功の展望があるか発見しようと望むであろう（Schmid 2004: 247ff.）。たとえば、交換関係の設定が見返りへの彼らの関心を相互に調和させるかどうか、行為の両立性を有効化するために支配権が授けられるべきか、行為者が道徳的義務を目指すときに、ベターオフであるかどうか。いずれにせよ、対応する問題解決を有効化するために集団決定が要求されるかどうか、行為コースの私的な決定が許されるかどうか（Coleman 1986: 15ff.）、影響力と暴力の使用がどれほど見返りを生じるか（Boehm 1987; Gambetta 1993）、契約が締結されねばならないかどうか（Schweizer 1999）、信用ないしは何らかの社会関係資本が蓄積されうるかどうか（Bourdieu 1992: 46ff.）、損害が補償されるかどうか（Sneed 1997）を我々は確かめねばならない。この条件カタログの明白な多様性と開放性は、彼らの相変わらずの無知、邪な心、破廉恥にもかかわらず、行為者は少なくとも一時共適応のニーズに十分な防衛を見いだすことが出来る希望を認めるのは、共適応の理論的にきわめて不透明な絡まった様々な手続きであるというテーゼを示唆している。

しかしながら、相互に適応した相互行為の永続的安定化が執行されうるかどうかは未決の問いである。事実当初から社会理論はどんな条件下で行為者は機能的ないし有機的形態の関係を維持することに成功を収めることが出来るのか、彼らは自分を装いを新たにするか放棄することを強いられているとみているかどうか、明らかに結論的には解決できない問いに専念してきている。もちろん確かなことは、社会秩序に関する問いに答えるためには、さらに説明の二つのステップが必要である。まず我々は近年「集積問題」という題のもとで論じら

れてきているものを考察しなければならない<sup>8</sup>。この問題の解決は行為者が取り組まねばならない共通の共同適応の集合的帰結をいかにして同定するかというアイデアを開発することを要求する<sup>9</sup>。そのような集計のまさに論理的性質は依然として係争中である (Schmid 2009a)。しかしメカニズムによって規制された行為は形式的・分析的変換規則 (Esser 2000; Lindenberg 1977) の単なる結果ではなく、むしろあるメカニズムの基底にある法的、規範的規制の非分析的因果帰結であることが明白であるように思われる。すなわちメカニズムのルールに基づいた操縦はその集積結果が同定される以前にすでに知られていなければならない。

しかしながら、集合行為の帰結の同定は行為者がこれらの帰結に自らどのように処すべきか、彼らがそれらに少しでも反応できないものかどうかを決定しない。それ故、説明の任務を完了するためには、我々はさらにもう一つのステップを必要とする。彼らの集合行為の集積効果 (合成効果) がかれらの今後の決定に、そして考察中のメカニズムの再生産、再編成確率にどのように影響しているかを判定するために、研究者はそれらの再帰的效果 (recursive effect: Luhmann 1997) に関するさらなる情報を必要とする。それは、行為者が彼らの相互に関連した行為の隠れた効果に関して不十分にしか精通していないので、行為者が彼らの行為に結びつけ続ける可能性のような主体的意欲にそのようなメカニズムの集合効果が影響する方向の発見の仕方を知るときに限って獲得される。有意義な仕方で、研究者は、行為者がそのような再帰的效果について一般には不正確な知識しか持たないこと、その上行為者はネガティブに査定された反響を真剣に拒んでも、他方で、彼の機会の根本的な変化のために、彼のこれまでの関係形式ならびに独自に欲する関係形式を今後も有利に制御することがかなわないし、決して成功しないことを考慮すべきである<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> すべて行為者が自己の計算の上で行為するなら、行為結果のこの計算上単純な総和は規制された調整ではなく、まさにメカニズムと呼称される。その際行為者の自立性は共有された法律の基本条文に一致しなければならないと人が考えるときに、言葉の使用を単純化できる。

<sup>9</sup> すでに明らかなように、集積問題を克服するためにもつばら分析命題が必要だと信じる著者が存在する。その助けを借りて、人は社会関係の集合的帰結を行為者の個々の行為からどのようにして生じるかを計算上のやり方で挙示することができる (Lindenberg 1977; Esser 2000; Hedström 2005)。しかし現実には、メカニズム的に編成された行為の集合結果は形式・分析的変換規則の帰結としてではなく、多くの場合、一定のメカニズムとその調整結果を基底に持つ法規制ないし規範の (まず発見されるべき、非分析的) 結果として生じる。さらなる詳細は Schmid 2006: 169。

<sup>10</sup> 上記のいずれのケースでも、研究者は見習いよりも聡明で視野が広くなければならない。それは彼が行為者の主観的見方と行為の仕方を再構成出来るだけでなく、行為者の客観的状況の要請と客観的な可能性を知っていることを前提とする。観察者はこの知識を持って何をすべきか。その場合、観察された事柄の解明を目指すかどうかは全く未定の問いを表す。Beck は説明されていない場合に、戦術の観察された事項を指示するものに、所有権の設定を請求するのに対して、Luhmann は介入可能性に対して懐疑的である。



### 3. 解釈

メカニズム的説明論議を4つのステップに分けることはいくつかの注釈を必要とする。あるものはヘンペルのオリジナルな説明モデルとの両立性に関するもの、他のものはメカニズム的説明の支持者が引き出すことが出来ると信じているヒューリスティックに照射する。

#### 3.1 多水準分析と演繹

まず、それが社会科学的説明が多水準の層をなした説明をなすと主張する (Hedström 2005: 35) 限り、その説明パターンが単純なヘンペルモデルと異なることが明らかにされるべきである。個人行為者の行為を説明することが問いであるところの説明の第一ステップにおいてだけ、ヘンペルの説明論理に一致する。このためには二つの収斂的要件が充足される必要がある。一方で、個人行為のいずれの説明も個々の行為者が一定行為をどのように確定するかに関する法則定立的仮定にアピールすることが出来るべきである。厳密に個人主義的な行為理論はその焦点を置いた考察がとりわけ Jon Elster (1979, 2000) によって推奨されている当該の心理メカニズムを描写する。眺めうる限りで、疑問の俎上に上る行為理論のすべては、行為者による選択を行為者自身の純粋に個人的、意図的、自己に定位した内部活動として扱っている。我々の法則定立的知識は所産としての社会関係、行為の帰結、反響ではなく、個人行為の生成、選択にもっぱら関係するものと私は仮定している。

このテーゼは私が思うには、些細でない帰結をもたらす。つまり我々が社会構造的説明を直接説明項から演繹することを可能にする社会法則の知識を一切持たないならば、基底的な行為理論に依拠することなしに社会科学的説明を構築することは出来ない。社会科学的説明はそれ故必然的に行為理論的 (法則定立的) コアに言及する (Esser 1993: 95; 2004: 34, 37)。別な定式では、社会現象はその生成、働き、再編成が個人行為者の個々の適応的行為に基づいて説明されるとき (Lindenberg 1977, 1992, Little 1998) に限って、説明されてきているものと見なされる<sup>11</sup>。個人主義の基本的な方法的考えに従い、これはある水準  $n$  にある社会的被説明項が水準  $n-1$  にある個人選択の理論に照らして説明されねばならないことを要求する。こんな風に、社会科学的説明はミクロに基盤をおく、ないしは深い説明 (Bunge 1967: 26ff.) の形式で活躍する<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> ある意思決定の同じ軌跡を仮定する同等の同質化仮説が確認されるとき、選挙方式をひとは集団で購入した生産関数に遡らせることができた。この運び方に関して、Mayntz (2004: 246ff), Mayntz/Scharpf (1995: 50)。どんな条件下でこれが当てはまるかは、その開始を意思決定パラドックスの発見に持つ集合決定ないし公共決定の理論 (Arrow 1978<sup>2</sup>; Sen 1974) が明らかにしなければならない。

<sup>12</sup> Watkins (1992: 127) は、説明プログラムはその深さ (と幅) の増殖に従って判定されると述べてい

つまり、深い説明の定式は次に述べる第二の条件が満たされてようやく可能になる。行為理論はもっぱら行為選択の心理メカニズムを指しているのだから、社会科学的説明を完結するには、個人理論の先行条件に加えて、行為者の行為状況と生じる問題に関する情報が必要である。そのような情報は、構造条件の独自の超個人的性質を認識し行為ないし行動に関する仮定への論理的な還元を先行する状況限定的付加仮説の形で導入されねばならない。そのような還元を遂行する代わりに、我々は行為者の外部環境がコンテンツな仕方で行行為者の決定行為を水路づけるものと仮定しなければならない。それゆえ、多水準説明の第一ステップは、所与の行為理論と独立に行行為者の状況的（構造的）機会に関するテスト可能な仮説に言及しなければならないときに限って成功を収める。

そのような状況仮定の導入によって、我々は理論的技法から第一水準の理論に先導されたモデル化に入る。すなわち、行為理論を行行為者の実際の意思決定状況に適用する際に、我々は個人行為を先導するコンテンツで非常に多様な条件とコンテキストについての状況をモデル定式化する。それによって、我々はこのモデル化は社会状況の個別性に関する確定的か帰納的に獲得された法則に照射しないだろうと仮定し続ける。もし我々がこれらの問題になっているコンテキストがどのようにして複数の行為者の行為から生じるかという問いに答えることに関心があるなら、我々はどんな条件下で崩壊のない共適応が生起するかに関する補助仮定に依拠しなければならない。そのような仮定の中には、信頼できるルールに依拠することはこの目的にかなっているだろうという仮定だけでなく、どんな状況下で、自己利害行為者はそのようなルールを設定し、遵守する必要な場合には改訂する意欲を示す用意があるアイデアも含まれる（Baurmann 1996; Schmid 1998: 118ff.; 131ff.）。しかしながら、これはここで我々は相互依存に定位したメカニズムないしは（Douglas North 的意味での）ルールに基づいた制度を、つまり我々が対人適応の高度にコンテンツで可変的な過程として把握すべき行為規制装置（それは制約的な社会事実として働きながら、個人行為者の行為の自由の絶対的限界を与える）を設計しなければならないはずということの意味する。かくして、説明の任務は、自己利害的行為者がお互いに自己の最大利益を追求することを断念せざるを得ない社会的枠組み（これは共同行為者の道徳的に受け入れがたい損害を与えることと結びつく傾向がある）を設計するメカニズムのプロセスモデルを開発することにある。

説明の第3, 4ステップは、あるメカニズムの存在が創発的集積効果を引き起こす事実に関心を置く。創発的集積効果は行為者の行為の可能性、状況知覚、動機に対する反作用的影響によって仲介されて（Hedström 2005: 42ff.）、彼らの今後の意思決定に作用し、さらに当

---

る。Bunge (1967: 26ff) は科学者にメカニズムの探求の助けを借りて、深い説明を与えることを要求する。私は深い説明概念がどこに由来するか明確化できない。

該のメカニズムの持続可能性と変容に作用する。重要なのは、行為についての個人のプロジェクトの不確定のせいで、我々ここでは一般化可能な類の法則に出会えないことである。そのかわりに集合行為の帰結と反作用帰結を同定するために、我々はメカニズムの設定と働きについて我々が知らねばならないことを超えた情報を我々に提供するコンテンツ豊かな仮説を必要とする。

上記の考察に従って構成された説明論議の論理形式は、もはや単なる多水準であるだけでなく演繹的でもある (Hedström 2005: 30f.)。これは個人行為の説明にだけでなく以後のステップにも当てはまる。後者では我々は複数の行為者の行為と状況に関する過程から出発して、行為者の可能な相互依存、メカニズム生成に対する影響、それらの反作用的な集合的帰結に関して論理必然的な演繹を追求する。上記の説明ステップを組み立てることによって、我々は説明論議を完結することが出来る。それによって、議論全体の軌跡は前のステップで扱われた要因が後続のステップでパラメータないし境界条件として機能しうる事実と論理的に結びつけられる。繰り返し述べてきたように、各さらなる説明ステップは各水準の状況に限定される peculiarity (特色) に関する仮定を必要とすることが述べられるべきだ。その仮定の選択は今度はわれわれが次に与えられるステップの被説明項をすでに確定しているときに限って可能で、幸運な場合我々のモデルにレリバントな意図と問題点を特定することを我々に強いる。

説明の様々なステップの論理的に完結する連結は二つの含意を持つ。第一は、行為を水路づけるメカニズムの働きと集合的帰結の静態的分析は、対応するシステムの通時的なしばしば不確定な行動を描写する動態的モデルに転換されうる。このモデルは、同じ理論的指針のフレームの中で構造的再生産、構造変動を取り上げることが可能にする (Boudon, Luhmann)。第二に、彼らの努力の主として意図せざる帰結の問題が繰り返し彼らに反応の変更、斬新な反応の刺激を与える彼らの行為の解決を見いだす限り、彼らの社会的交際形式の断固とした、超安定した均衡は考えられないであろう。こんな風に、我々は伝統的な機能主義社会秩序論 (Durkheim, Weber, Parsons とその学派) の窮屈さを逃れることが出来る。

### 3.2 メカニズム的説明のヒューリスティクス (簡便な方法) に関して

ここで描かれている類のミクロに基盤をおく説明論議の論理とそれと関連した論証とモデル化の技法から、我々はもし我々が理論に導かれ、同時に社会学的リサーチのテスト可能なプログラムに興味があるなら、どのように進めるか、いくつかの簡便なルールを引き出すこ

とが出来る<sup>13</sup>。

まず、説明のステップのすべてを同時に実行しなければならないとか、モデル化の各水準で考慮に入れられうる変数のすべてを同時に処理しようとしなければならないと感じているものは一人もいないはずである<sup>14</sup>。我々が常数（1に等しい、括弧の前のモデルパラメータ）と仮定するどれかの要因を特定するだけでも重要である。というのは、そうでなければ、われわれは説明ステップの論証の忠実性を判定することも出来ないし、そのテスト可能性も確保できないから。つまり私は Imre Lakatos (1970: 10f.) ないし Nancy Cartwright (1989: 161ff.) がしたように、「他の条件が等しければ」の制御された使用を擁護する<sup>15</sup>。

我々の演繹を進めるためには、説明のいずれのステップでも付加仮定を導入しなければならないので、我々はいつ上記の付加テーゼを引き出すことが出来るか考慮する理由がある。多くの事例で我々はそれらを新たに発明しなければならないし、リサーチプログラムの豊饒性は我々がそれを行う能力にかかっている。しかし、我々はそれらを他のモデルから借用することも出来るなら、我々自身の下位モデルを用いた仕事を対応するパラレルな試みと論理的に結びつけることも可能である。こんな風に、我々のモデル化は Heelan によって描写されたオープンなセット理論的性格を獲得する。我々は上記の付加仮定自体をテストしなければならない。結論的な回答は我々が何を知りたいと望んでいるかに左右されるだろう。時には、レリバントな付加仮定が真である場合にのみ、望まれた被説明項が演繹可能であるかどうかを明確にすることで十分である。逆に可能な予測のいずれは、それが我々の予想に反してレリバントな条件を満たすことが出来なかったことによって説明されうる。その仕事はこれらの推論をもっと密に検討することであり、これは割り当て可能な方向にリサーチを継続することに導き、同時に Lakatos (1970: 135) のポジティブなヒューリスティックスの条件を満たす。

その上あらゆる部分モデルはこれまで未考察だった含意からの演繹を可能にする。それは我々の公準の説明価値と真理価値を検討するためにテストされうるものである。ここでは、私は（前節で論じられた付加仮定の場合のように）経験的リサーチの注意が通常の帰納的、従って非理論的なデータ収集から我々のモデル化にレリバントなトピックの選択に別の途<sup>ルート</sup>で輸送されうる可能性を念頭に置いている (Esser 2004: 28ff.; Hedström 2005: 114ff.)。これ

<sup>13</sup> わたしは Hans Albert (2000) の方法論的見直し主義の基本的考えに従っている。

<sup>14</sup> そのような進め方はエレガントさ欠如が非難されるだけでなく、技術的にもほとんど実現が難しい。モデル化の技法の限界がどこにあるかは、シミュレーション技法 (Hedström 2005) ないし同じように位置づけられる Sozionik の試み (Kron 2005; Fisher/ Frorian/ Malsch 2005) が示すことができる。

<sup>15</sup> 数十年前に Hans Albert (1967) がすでに指摘しているように、我々が他の条件を名指ししないとき、我々のモデルテーゼは中身のない従って検証できない言明関数を生成する。反対に、想定されたパラメータ群が同一の範囲を保有する限り、我々は代替仮説を互いに比較することができる。

はリアリストの、真理を導く、その限りで批判的な方法論の通常の基準を充足する理論に先導された経験的リサーチの領域を切り開く。

検討の要求は行為理論自体にも適用される。この関連で、社会科学が今まで彼らの説明の基礎としたいと思っているのは行為のどんな仮定か、様々な提案がどのようにして論理的に合致させられるかに関して同意に達し得ないという事実から特別の困難が生じる。私は Esser (2003: 70f.) とともに、人間の行為理論の一般理論に関するこれまでのすべて考察は総合されうると信じている (Schmid 2004: 24ff; 2006)。我々が様々なパラダイムのそのような統合を達成することに骨折るべきかどうかは、我々が効果的な比較方法に依拠できるかどうかと、行為理論にメカニズム的構造的つながりを見いだそうとする試み (Lindenberg 1992: 19; Stinchcombe 1993: 35) において、構造的連関の水準で付加的な洞察を行為に関する我々の公準の拡張がどれほどまで生じるかにかかっている。そのような付加が可能であり、望ましいのであれば、行為理論のハードコアの保護を過大視しその考えられる拡張を放棄することは方法的にはナンセンスである (Stegmüller 1980: 377)。同時に Lakatos の意味での同定可能なリサーチプログラムを追求するために、行為仮定のセットを不変のままに残すことは全く正当なことである。

最後に、メカニズム的説明プログラムの簡便な方法はもちろんだんな理由からであれ、我々にたまたま興味を持たせたメカニズムを考察する自由を与える。そして我々は互いに様々なメカニズムの一つに主として専念するように求めることによって、お互いからリサーチプログラムを区別することは賢明であることを排除できない。このルールへの躊躇しない信奉は社会科学の特別学問への比較的論争されることのない分業を説明する。しかしながら、独自に活躍する学問は、そのような相互依存的に活躍する学問は相互行為のすべての問題が単一のメカニズムによって解決されうると主張することに警戒するはずである<sup>16</sup>。この主張は健全な帝国主義<sup>17</sup>に聞こえるだけでなく、行為問題を解決する様々な手続きが存在することに鑑みれば、明らかに間違っている。他方で、たとえ可能であっても、様々のメカニズムの共同作用の考察は重荷を構成するので、おそらく、個人行為メカニズムの一般化可能な構造モデル (Esser 2002) の管理された精密化に様々なリサーチプログラムを集中させることは理にかなったことであろう。

<sup>16</sup> Gary Becker (1982: 3) にとっては、すべての交通関係は市場関係であるのに対して、社会学者にとっては、沢山の行動様式の中につけ過程の一つの帰結を見だし、マルクス主義者は社会生活のすべての現象を階級闘争の現れとみなす。

<sup>17</sup> 私は、分析技法とテーマ主張を正当化するために、経済学だけでなく、社会学もそのような帝国主義に奉仕していると思う (Schmid/Maurer 2003)。

## 問題の所在 (独語版)

その大学制度の開始以来社会科学、その中でも社会学と歴史学が次の問を背負ってきている。「その学問は説明科学として通用しているのか、どんな意味で通用しているのか。」この不明確さの理由は、固有の問題を自然科学的方法の助けを借りて扱う性向、人間行為の非法定立的性質の観念を通じて、そこから引き出された次の思いこみ、つまり「概念分析 (Winch 1958)、セマンテック・レトリカルな分析 (McCloskey 1998; Brown 1987)、類型形成 (Kluge 1999)、描写 (Luhmann 1992: 147ff.)、枚举 (Danto 1965: 233ff.)、個性的 (だが文化的な) 出来事の再構成 (Weber 1968)、社会的なものの不可欠な条件を通じてのコンスティテューション分析 (Luckmann 1992)、あるいは固有の文化科学的手法 (Abel 1983: 3) のために、社会科学の法則に基礎をおいた説明は後方に退かせられた」で十分説明される。

私は以下で、多くの点で濃密なこの論争史を追跡するのではなく、これまでほとんど注目されてこなかった哲学的先行の仕事に照らして、この 20 年にますます流通したものと格付けされる一つの打開策を素描する<sup>18</sup>。その際社会科学が説明の任務を持つという見解を支持する限り、少なくとも次の初発テーゼを共有すべきである。「社会科学が人間行為者のゲマインシャフト化、ゲゼルシャフト化形式に取り組むことが正しいならば、それは一つの多水準的説明問題に直面している自分に気づく。一方では、説明関心の中心に在るのは、各自の行為 (個人行為者) ではなく<sup>19</sup>、マクロ構造的被説明項 (いわゆる社会的出来事、集合現象<sup>20</sup>) であることは無論である。他方で、個人行為の理論に依拠することなしには、これがどのように生成し、次第に形成され、解体されるかに到達することは出来ない。」この二つ並びに若干の付則的公準から、「社会科学の説明は、マクロな出来事のミクロに基盤をおいた説明として内容ある行為理論に言及しながら語られる。その際行為者がその助けを借りて、自分の行為を予想に応えるように互いに合わせる、定常的な調整メカニズムへの言及は、適切な説明の成功にとって重要な意味を持っている」が帰結する。

## 総括 (独語版)

社会科学的説明は還元的な行動説明 (Homans) の形もとらないし、(Blau が提案したような) 行為者のすべての行為を先導する視点を随伴する純粋に構造的説明にも汲み尽くされ

<sup>18</sup> 科学哲学の新しい説明理論に関しては、Salmon 1984, 1989.

社会科学哲学におけるパラレルな議論に関しては、Hayek (1972), Bunge (1997, 2004), Little (1991, 1998) の著作が挙がる。私は別の著作 (2006) で彼ら 3 人の著作を取り扱っている。追加として、メカニズム的説明の独自の解明に取り組む Manicas (2006) を挙げたい。

<sup>19</sup> これは人を心理学、神経科学に向かわせる。それは、社会学者がまず関心を寄せる構造コンテキストが前提としなければならないから。

<sup>20</sup> 社会的出来事の用語の使用 Balog/Cyba 2004; Balog 2006, 集合現象の用語の使用は Popper 1966.

ない。むしろそれはマクロ社会的出来事を、法則定立的行為理論への言及しながら枚挙しうる数の自己利害と自己権力を有する行為者の行為の共作用の創発的結果としてマイクロ基盤的に説明しなければならない。その際、単純なヘンペルの演繹的法則定立型モデルは、4つの互いに還元できない説明ステップによって包括的な多水準モデルに拡張される。マクロ現象を説明するためのそのような水準連結 (Mayntz 1997: 319) の可能な構築は一つの簡便な方法に身をゆだねることが出来る。それは、説明の責務を制御可能な仕方で分割し、経験に反する知見がもはや拒絶されないときには流通する。それは、特定の結果の詳しい説明がこれまで重視されてこなかったさらなる影響の大きさの再考を要求しないかと自問する。

たとえば James Coleman (1990: 11f), Hartmut Esser (2004: 40 他) が提案したように、我々が不動の行為仮定の文章の助けを借りて、出来るだけ多数の多様なテスト可能な結果を同定するために特定のモデルを定式化する限り、我々は Lakatos (1970) のいうリサーチプログラムに従っている。その不動の行為仮定は、我々によって意図された構造分析に進行の中でも不変のものと思なされる。これは正当だが、代替リサーチプログラムへの架橋が提案されるのかどうか、されうるとすればどの箇所<sup>21</sup>、固有のリサーチプログラムの追求がこれまで設定されてきた行為理論の前提の見直しをどこまで迫るのか (Hechter 1997: 152)、という疑問がしばしば出されるはずである。私が推測するところでは、プログラム限定的メカニズムがいかに相互に結びつけられるのかは、そのような見直しと拡張によって初めて提起される。この問いの解明の際に、独善主義はその場所には全く存在しない。様々なリサーチプログラム間の結合から一つの統一された<sup>22</sup> グローバルモデルに到達できるということは、論理的には確かなにはじめから閉め出されてはいない。様々な理論プログラムと説明プログラムの対決という今日の状況では、具体的な研究上の問いの解決 (ないしは共同介入のもくろみ) のためにそれが繕われるかどうか、多様なモデル化が矛盾しないか、どこで、どれだけ広く<sup>23</sup>、ということが、十分に現れることがまれなことに鑑み、そのいくつかに少なくとも時折解明が取り組まれてきたことで十分であろう。

最後の事例で扱われたように、かように尋常でない責任を負わされた理論プログラムの収縮 (退化) を抑えるために、(Hans Albert (2000) が提案した) 批判的合理主義の基本的考えにさかのぼった方法論の見直しを指摘する。その次には、社会科学の統一は、包括的な社会理論やすべての犠牲を払った統一的な概念カタログを目指す営みよりも、あらゆる学問を超越して可能な方法的にしっかりした研究ヒューリステックの方に位置している。後者は、

<sup>21</sup> 私のみるところでは (Schmid 2004: 93ff.), Ritsert (1975), Richter (2001) が明言しているように、社会学、行動科学にはクーン流のパラダイムは何ら存在しない。

<sup>22</sup> この方向で Thomas Fararo (1989a; 1989b; 2001) は考えているように思える。

<sup>23</sup> そのような骨折りの成果は Schmid/Maurer (2003)

様々の調整メカニズムとその再帰力をもった影響に関する行為理論のミクロに基盤をおいたモデル化に尽力してきた。

文献一覧

- Abel, Bodo 1983 *Grundlagen der Erklärung menschlichen Handelns. Zur Kontroverse zwischen Konstruktivismus und Kritischem Rationalismus.* Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)
- Albert, Hans 2000 Methodologischer Revisionismus und diskursive Rationalität. Bemerkungen zur Methodendiskussion in den Sozialwissenschaften. *Österreichische Zeitschrift für Soziologie.* 25 : 2-28.
- Balog, Andreas 1989 *Rekonstruktion von Handlungen.* Opladen : Westdeutscher Verlag.
- 2001 *Neue Entwicklungen in der soziologischen Theorie.* Stuttgart : Lucius & Lucius.
- 2006 *Soziale Phänomene. Identität, Aufbau und Erklärung.* Wiesbaden : VS Verlag.
- Balog, Andreas/Eva Cyba 2004 “Erklärung sozialer Sachverhalte durch Mechanismen. in Manfred Gabriel (eds.) *Paradigmen der akteurzentrierten Soziologie.* Wiesbaden : VS Verlag. pp. 21-41.
- Baurmann, Michael 1996 *Der Markt der Tugend. Recht und Moral in der liberalen Gesellschaft. Eine soziologische Untersuchung.* Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)
- Bayert, Kurt 1980 *Wissenschaft als historischer Prozess. Die antipositivistische Wende in der Wissenschaftstheorie.* München : Wilhelm Fink Verlag.
- Becker, Gary S. 1976 *The Economic Approach to Human Behavior.* University of Chicago Press.
- Blau, Peter M. 1977 *Inequality and Heterogeneity. A Primitive Theory of Social Structure.* New York : The Free Press and Collier Macmillan.
- 1994 *Structural Contexts of Opportunities.* University of Chicago Press.
- Boehm, Christopher 1987 *Blood Revenge. The Enactment and Management of Conflict in Montenegro and Other Tribal Societies.* Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Boudon, Raymond 1977 “Soziale Bedingtheit und Freiheit des Individuums. Das Problem des homo sociologicus.” in Klaus Eichner/Werner Habermehl (eds.) *Probleme der Erklärung sozialen Verhaltens.* Meiselheim : Verlag Anton Hain. pp. 214-76.
- 1979 *Widersprüche sozialen Handelns.* Neuwied and Darmstadt : Luchterhand Verlag.
- 1986 *Theories of Social Change. A Critical Appraisal.* Cambridge : Polity Press.
- 2003 *Raison, bonnes raisons.* Paris : Presses universitaires de France.
- Bourdieu, Pierre 1992 *Die verborgenen Mechanismen der Macht, Schriften zu Politik und Kultur I.* Hamburg : VSA-Verlag.
- Bromberger, Sylvain 1966 “Why-questions.” in Robert G. Colodny (ed.) *Mind and Cosmos. Essays in Contemporary Science and Philosophy.* University of Pittsburgh Press. pp. 86-111.
- Brown, Rechar H. 1987 *Society as Text. Essays on Rhetoric, Reason and Reality.* The University of Chicago Press.
- Bunge, Mario 1967 *Scientific Research II. The Search for Truth.* 3rd. rev.edn. Berlin, Heiderberg : Springer.
- 1979 *Causality and Modern Science.* New York : Dover Publications.
- 1997 “Mechanism and Explanation.” *Philosophy of Social Sciences* 27 : 410-465.
- 2004 “How does it work ? The search for explanatory mechanisms.” *Philosophy of Social Sciences* 34 : 182-210.
- Campbell, Colin 1996 *The Myth of Social Action.* Cambridge University Press.
- Cartwright, Nancy 1989 *Natures Capacities and their Measurement.* Oxford : Clarendon Press.



- Coleman, James S. 1986 *Individual Interests and Collective Action*. Cambridge University Press.
- 1990 *Foundations of Social Theory*. Cambridge, MA : The Belknap Press.
- Danto, Arthur C. 1965 *Analytical Philosophy of History*. Cambridge University Press.
- Dray, William 1957 *Laws and Explanation in History*. Oxford : Clarendon Press.
- Elster, Jon 1979 *Ulysses and Sirens*. *Studies in Rationality and Irrationality*. Cambridge University Press.
- 2000 *Ulysses Unbounded*. *Studies in Rationality, Precommitment and Constraints*. Cambridge University Press.
- Esser, Hartmut 1993 *Soziologie. Allgemeine Grundlagen*. Frankfurt : Campus Verlag.
- 2000 *Soziologie. Spezielle Grundlagen*. Bd.2 : Die Konstruktion der Gesellschaft. Frankfurt : Campus Verlag.
- 2000a *Soziologie. Spezielle Grundlagen*. Bd.3 : Soziales Handeln. Frankfurt : Campus Verlag.
- 2002 “Was konnte man (heute) unter einer ‘Theorie mittlerer Reichweite’ verstehen ?” in Renate Mayntz (ed.) *Akteure-Mechanismen-Modelle. Zur Theoriefähigkeit makrosozialer Analysen*. Frankfurt : Campus Verlag. pp. 128-50.
- 2003 “Die Rationalität der Werte. Die Typen des Handelns und das Modell der soziologischen Erklärung.” in Gert Albert et al. (eds) *Das Max Weber-Paradigma*. Tübingen : Mohr Siebeck. pp. 153-87.
- 2004 *Soziologische Anstöße*. Frankfurt : Campus.
- Fararo, Thomas 1989 *The Meaning of General Sociology. Tradition and Formalization*. Cambridge University Press.
- 2001 *Social Action Systems. Foundation and Synthesis in Sociological Theory*. Westpoint : Praeger Publishers.
- Gambetta, Diego 1993 *The Sicilian Mafia. The Business of Private Protection*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Hardin, Russell 2002 *Trust and Trustworthiness*. New York : Russell Sage Foundation.
- 2003 *Indeterminacy and Society*. Princeton University Press.
- Hayek, Friedrich A. von 1972 *Die Theorie komplexer Phänomene*. Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck).
- Hechter, Michael 1997 “Religion and Rational Choice Theory.” in Laurence A. Young (ed.) *Rational Choice Theory and Religion*. London : Routledge. pp. 147-159.
- Hedström, Peter 2005 *Dissecting the Social. On the Principles of Analytical Sociology*. Cambridge University Press.
- Hedström, Peter/Richard Swedberg/Lars Udehn 1998 “Popper’s situational analysis in contemporary sociology.” *Philosophy of Social Sciences* 28 : 339-64.
- Heelan, Paul A. 1981 “Verbandstheoretische Betrachtung des Erkenntnisfortschritts.” in Gerard Radnitzky/Gunner Andersson (eds.) *Voraussetzungen und Grenzen der Wissenschaft*. Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)
- Hempel, Carl G. 1965 *Aspects of Scientific Explanation and other Essays in the Philosophy of Science*. New York : The Free Press.
- Homans, George C. 1974 *Social Behavior. Its Elementary Forms*. 2nd edn. New York : Harcourt Brace Jovanovich.
- Kahneman, Daniel/Amos Tversky 1979 “Prospect theory. An analysis of decision under risk.” *Econometrica* 47 : 263-91.
- Kluge, Susanne 1999 *Empirisch begründete Typenbildung. Zur Konstruktion von Typen und Typologien in der qualitativen Sozialforschung*. Opladen : Leske & Budrich.
- Koertge, Noretta 1992 “Explanation and its problem.” *The British Journal of Philosophy of Science*

- 43 : 85-98.
- Kuran, Timur 1998 "Social mechanisms of dissonance reduction." in Peter Hedström/Richard Swedberg (eds.) *Social Mechanisms. An Analytical Approach to Social Theory*. Cambridge University Press. pp. 147-71.
- Lakatos, Imre 1970 "Falsification and the methodology of scientific research programmes." in Imre Lakatos/Alan Musgrave (eds.) *Criticism and the Growth of Knowledge*. Cambridge University Press. pp. 91-195.
- Lindenberg, Siegwart 1977 "Individuelle Effekte, kollektive Phänomene und das Problem der Transformation." in Klaus Eichner/ Werner Habermehl (eds.) *Probleme der Erklärung sozialen Verhaltens*. Meiselheim : Verlag Anton Hain. pp. 46-84.
- 1985 "Rational choice and sociological theory. New pressures on economics and social science." *Zeitschrift für die gesamte Staatwissenschaft* 141 : 244-55.
- 1992 "The method of decreasing abstraction." in James S. Coleman/Thomas Fararo (eds.) *Rational Choice. Advocacy and Critique*. Newbury Park : Sage Publications. pp. 3-20.
- Little, Daniel 1991 *Varieties of Social Explanation. An Introduction to the Philosophy of Social Science*. Boulder : Westview Press.
- 1998 *Microfoundation, Method and Causation*. New Brunswick : Transaction Publishers.
- Louch, A.R. 1966 *Explanation and Human Action*. Oxford : Basil Blackwell.
- Luckmann, Thomas 1992 *Theorie des sozialen Handelns*. Berlin : Walter de Gruyter.
- Luhmann, Niklas 1992 *Universität als Milieu. Kleine Schriften*. Andre Kieserling (ed.) Bielefeld : Verlag Cordula Haux.
- 1997 *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt : Suhrkamp Verlag.
- McIntyre, Lee C. 1996 *Laws and Explanations in the Social Sciences. Defending a Science of Human Behavior*. Boulder : Westview Press.
- Mahoney, James 2001 "Beyond correlation analysis. Recent innovations in theory and method." *Sociological Forum* 16 : 575-93.
- Manicas, Peter T. 2006 *A Realist Philosophy of Social Science. Explanation and Understanding*. Cambridge University Press.
- Mayntz, Renate 2002 "Zur Theoriefähigkeit makro-sozialer Analysen." in Renate Mayntz (ed.) *Akteure-Mechanismen-Modelle. Zur Theoriefähigkeit makro-sozialer Analysen*. Frankfurt : Campus Verlag. pp. 7- 43.
- 2004 "Mechanisms in the analysis of social macro-phenomena." *Philosophy of Social Sciences* 34 : 237-59.
- McClosky, Deirdre 1998 *The Rhetoric of Economics*. Madison : The University of Wisconsin Press.
- Merton, Robert K. 1964 *Social Theory and Social Structure*. New York : The Free Press.
- North, Douglass C. 1990 *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*. Cambridge University Press.
- Popper, Karl R. 1961 *The Poverty of Historicism*. London : Routledge and Kegan Paul.
- 1966 *The Open Society and its Enemies*. Vol. II The High Tide of Prophecy : Hegel and Marx. 5th.edn. London : Routledge and Kegan Paul.
- Ritsert, Jürgen (ed.) 1975 *Gründe und Ursachen gesellschaftlichen Handelns*. Frankfurt : Campus Verlag.
- Richter, Rudolf 2001 *Soziologische Paradigmen. Eine Einführung in klassische und moderne Konzepte*. Wien : UTB
- Salamon, Wesley C. 1984 *Scientific Explanation and the Causal Structure of the World*. Princeton

- University Press.
- 1989 “Four Decades of Scientific Explanation.” Philip Kitcher/Wesley Salamon (eds) *Minnesota Studies in the Philosophy of Science XIII. Scientific Explanation*. Minneapolis : University of Minnesota Press. pp. 3-219
- Sawyer, Keith 2005 *Social Emergence. Societies as Complex Systems*. Cambridge University Press.
- Schmid, Michael 1998 *Soziales Handeln und strukturelle Selektion. Beiträge zur Theorie sozialer Systeme*. Opladen : Westdeutscher Verlag.
- 2004 *Rationales Handeln und soziale Prozesse. Beiträge zur soziologischen Theoriebildung*. Wiesbaden : VS Verlag.
- 2006 *Die Logik mechnismischer Erklärungen*. Wiesbaden : VS Verlag.
- 2009 “Theorien, Modelle und Erklärungen. Einige Grundprobleme des soziologischen Theorievergleichs.” in Gerhard Preyer (ed.) *Neuer Mensch und kollektive Identität in der Kommunikationsgesellschaften. Karl Otto Hondrich zum Gedächtnis*. Wiesbaden : VS Verlag.
- 2009a “Das Aggregationsproblem. Versuch einer methodologischen Analyse.” in Paul Hill et al. (eds) *Hartmut Essers Erklärende Soziologie. Kontroversen und Perspektiven*. Frankfurt : Campus Verlag. pp. 135- 66.
- Schmid, Michael/Andrea Maurer 2003 “Institution und Handeln. Probleme und Perspektiven der Institutionstheorie in Soziologie und Ökonomie.” in Michael Schmid/Andrea Maurer (eds.) *Ökonomischer und soziologischer Institutionalismus*. Marburg : Metropolis. pp. 7-46.
- Schweitzer, Urs 1999 *Vertragstheorie*. Tübingen : Mohr Siebeck.
- Scriven, Michael 1959 “Truism as the grounds for historical explanations.” in Patrick Gardner (ed.) *Theories of History*. New York : The Free Press and Collier Macmillan. pp. 443-75.
- Sened, Itai 1997 *The Political Institution of Private Property*. Cambridge University Press.
- Simon, Herbert A. 1983 *Reason in Human Affairs*. Palo Alto : Stanford University Press.
- Stegmuller, Wolfgang 1980 *Neue Wege der Wissenschaftsphilosophie*. Berlin, Heiderberg : Springer Verlag.
- Stinchcombe, Arthur L. 1975 “Merton’ s theory of social structure.” in Lewis A.Coser (ed.) *The Idea of Social Structure. Paper in Honor of Robert K. Merton*. New York : Harcourt Brace Jovanovitch. pp. 11-33.
- 1993 “The conditions of fruitfulness of theorizing about mechanisms in the social sciences.” in Aage B. Sorensen/Seymour Spilerman (eds.) *Social Theory and Social Policy. Essay in Honor of J.S. Coleman*. Westport : Praeger pp. 23-41.
- Ullmann-Margalit, Edna 1977 *The Emergence of Norms*. Oxford : Clarendon Press.
- Weber, Max 1968 *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck).
- Winch, Peter 1958 *The Idea of a Social Science*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Wilson, Catherine 2004 *Moral Animals. Ideals and Constraints in Moral Theory*. Oxford : Clarendon Press.
- Wippler, Reinhard 1978 “The structural-individualistic approach in Dutch sociology. Towards an explanatory social science.” *The Netherland Journal of Sociology* 14 : 135-55.
- Woodward, James 2003 *Making Things Happen. A Theory of Causal Explanation*. Oxford : Clarendon Press.
- Wright, George H. von 1971 *Explanation and Understanding*. London : Routledge and Kegan Paul.

【訳者後記】

訳出したのは Piere Demeulenaere 編 *Anaytical Sociology and Social Mechanism*. 2011 年 Cambridge University Press 刊行 pp. 136-153 所収 Michael Schmid 著 *The logic of mechanistic explanation in the social sciences* である。この論文はドイツ語で既発表のものを序論を簡略化、総括をカット、注を大幅に削減して再録したものである。訳文の末尾にドイツ語版序論と総括を掲載した。また省略されたドイツ語版の注の必要と思われるものは復元した。ドイツ語発表の最初のもものは、Macro Schmitt/Michael Florian/Frank Hillebrandt (Hrsg.) 2006 *Reflexive soziale Mechanism. Von soziologischen Erklärungen zu soziologischen Modellen*. Wiesbaden: VS Verlag.s. 31-64. 二番目のものは、Andreas Balog/Johanann August Schulein (Hrsg.) 2008 *Soziologie, eine multiparadigmatische Wissenschaft. Erkenntnisnotwendigkeit order Übergangsstadium?* Wiesbaden: VS Verlag. ss227-262. 題は、前者は英文題の独版、*Zur Logik mechanismischer Erklärungen in den Sozialwissenschaften*. 後者は題が代わって、*Die Logik mechanismischer Erklärungen und die Einheit der Sozialwissenschaft*. である。

またこの論文と内容がよく似ている論文に、Hans-Jurgen Aretz/Christan Lahusen (Hrsg.) 2005 *Die Ordnung der Gesellschaft. Festschrift zum 60. Geburtstag von Richard Münch*. Frankfurt: Peter Lang.ss. 35-82. 所収 *Sozial Mechanism und soziologische Erklärungen*. がある。その目次構成は下記の通りである。

第1節 問題の所在

第2節 社会学的説明の問題

第1項 ヘンベル-オッペンハイム説明モデル

第2項 ヘンベル-オッペンハイム説明モデル批判

第3節 それに代わる説明モデル

第1項 メカニズム的説明の論理

第2項 社会学におけるメカニズム的説明

第4節 メカニズム的説明プログラムのヒューリステック

第5節 メカニズム的説明プログラムの科学論理的帰結

第6節 要約と展望

こちらの方がヘンベル-オッペンハイム説明モデルとメカニズム的説明の対抗関係が明確に出ている。

シュミットのメカニズム的説明の論理については著書 *Die Logik mechanismischer Erklärungen*. (2006) がある。その目次構成は下記の通りである。

第1章 社会学的説明の論理

## 第2章 説明的社会学の哲学的基礎

第1節 メカニズムと「複雑現象の理論」: Friedrich A. von Hayek

第2節 因果性と社会システムと「メカニズム的説明」: Mario Bunge

第3節 ミクロな基礎付けと「因果的メカニズム」: Daniel Little

## 第3章 社会学理論におけるメカニズム

第1節 個人の意思決定と「構造的淘汰」: Robert K. Merton

第2節 個人の合理性と「行為の相互依存」: James S. Coleman

第3節 「架橋仮説」と「変換問題」: Siegwart Lindenberg & Reinhard Wippler

第4節 マクロ社会現象と「制約合理性」: Raymond Boudon

第5節 「生成的構造主義」と「生成的メカニズム」: Thomas J. Fararo

第6節 「社会的メカニズム」と「合理的」意思決定論: Peter Hedström & Richard Swedberg

第7節 プロセスメカニズムとその「因果的再構成」: Renate Mayntz

第8節 「生成的メカニズム」と「構造的モデル」: Hartmut Esser

## 第4章 メカニズム的説明の研究上のヒューリステック

訳出した論文は、この著書の第1章と終章を抜粋した印象を受ける。

シュミットは、1943年生まれで、1969年にハイデルベルグ大学を卒業、1971年に同大学から学位を取得し、1977年にアウグスブルグ大学より教授資格を取得、1980-1995年アウグスブルグ大学社会学教授、1995年より現在まで、ミュンヘン国防大学教育学部一般社会学教授である。彼の学位論文は、*Leerformeln und Ideologiekritik*。であり、エルンスト・トピッシュに師事しており、2004年の著書は、トピッシュに捧げられている。それゆえ彼はポツパー、ラカトス、クーンなどの科学哲学に関する造詣の深さを武器に、社会行為理論、社会システム論、社会変動論、進化変動論、社会規範論、社会秩序論の研究史、動向の把握に取り組んでいる。このほかにも、ウェーバー、デュルケム、ジンメルなどの古典社会学者、パーソンズ、マーソンの機能主義理論、コールマンをはじめとする合理的選択理論、ハイエク、新制度学派経済学、進化経済学など経済学に関する論文もある、非常にワイドな学者で、取り上げる対象によって準拠するスタンスが縦横に変化し、同じシュミットが書いたものとは思えない感覚にとられることもままある<sup>24</sup>。

<sup>24</sup> それを概観するには、1981~1995に発表した著書寄稿論文や雑誌掲載論文を集めた論文集『社会的行為と構造的淘汰—社会システム理論への貢献』(1998年刊行)を眺めるとよい。デュルケム、ウェーバー、ジンメル、マーソンの学説研究、社会規範、社会秩序論、社会システムと進化、社会ルールと進化に関する論文が収録されている。

私がシュミットの名を知った最初の論文は、ドイツ政治学会の機関誌に載ったコールマン『社会理論の基礎』の書評 (Schmid 1996) であり、コールマンの一周忌の追悼ワークショップをベルリン大学のハンス・ピーター・ミュラーと共同で開催した人物で、そのワークショップの報告を編集した『規範、支配、信頼—ジェームズ・コールマンの『社会理論の基礎』』の共同編集者として、編集者序言を執筆していることも知っている (Müller & Schmid 1998)。

彼はドイツ語以外では執筆しないので、ドイツ以外では社会学者の間でもほとんど知られていない。ここに訳出した論文が彼の手になる最初の英語論文である。シュミットは1992～2003年に発表した著書寄稿論文や雑誌掲載論文を集めた論文集『合理的行為と社会過程—社会学的理論構築への貢献』(2004年刊行)で、経済学博士学位(授与先不詳)も取得している。シュミットが合理的選択理論に関して書いた最初の論文(1996a)は1996年のもので、それまでは合理的選択理論に対する関心が必ずしも強くはなかった<sup>25</sup>。その姉妹編ともいえる社会学の行為理論史を扱った論文(1998a)の初出は1998年である<sup>26</sup>。彼は自分自身でモデル、理論を開発するのではなく、他者の開発したモデル理論を解説したり、動向や論点を整理するのが得意とする。理論同士の比較、モデル構築の比較に元来興味があった<sup>27</sup>。メカニズムの説明研究が近年社会学でも盛んになって、合理的選択理論の拡張の動向に興味を持つようになったようである。さらに彼にはHedström (2005)への書評、批判的コメントがある(2009, 2010)。彼は2010年にMaurerと共著で、大著(Maurer/Schmid 2010)を著している。Ullman-MargalitとElsterのCoordination, Cooperation, Conflictの相互適応の問題(problem of mutual adjustment)を継承発展させている。今後大いに話題となることであろう。訳者解説で言及した彼の著作、論文は以下の通りである。

- Schmid, Michael** 1972 *Leerformeln und Ideologiekritik*. Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)  
 ——— 1996 “Besprechungessay zu J.S. Coleman, Grundlagen der Sozialtheorie. 3Bde.” *Politische Vierteljahresschrift* 37: 123–131.  
 ——— 1996a “Rationales Handeln und Gesellschaftstheorie. Bemerkung zur forschungslogischen und ideologiekritischen Bedeutung der Rational-Choice-Theorie.” in Kurt Salamun (Hrsg.) *Geisige Tendenzen der Zeit. Perspektiven der Weltanschauungstheorie und Kulturphilosophie*. s. 217–245.  
 ——— 1998 *Soziales Handeln und strukturelle Selektion. Beiträge zur Theorie sozialer Systeme*.

<sup>25</sup> 2004著作に再録された題は改題されている。Die Theorie rationaler Wahl. Bemerkungen zu einem Forschungsprogramm.

<sup>26</sup> パーソンズの主意主義的行為理論を出発点に、その批判(エスノメソドロジー、シンボリック相互行為理論、ホームズ、マートン、合理的選択理論)、ミクロ・マクロ問題と行為理論(パーソンズ理論～合理的選択理論におけるメカニズム)が取り上げられている。この論文も2004年の著作集に再録されている。

<sup>27</sup> 社会変動論、社会システム論、社会的行為論、社会秩序論、規範・規則発生論をサーベイし優劣を比較するのが得意としている。

- Opladen : Westdeutscher Verlag.
- 1998a “Soziologische Handlungstheorie-Probleme der Modelbildung.” in Andrea Balog/Manfred Gabriel (Hrsg.) *Soziologische Handlungstheorie. Einheit oder Vielfalt. Österreichische Zeitschrift für Soziologie. Sonderband 4* : 55-103.
- 2004 *Rationales Handeln und soziale Prozesse. Beiträge zur soziologischen Theoriebildung.* Wiesbaden : VS Verlag.
- 2006 *Die Logik mechanistischer Erklärungen.* Wiesbaden : VS Verlag.
- 2009 “Logik und Reichweite Mechanismus-basierter Erklärungen-Überlegungen zum Anspruch der Analytischen Soziologie.” Symposium. Peter Hedstrom, Anatomie des Sozialen-Prinzipien der Analytischen Soziologie. *Soziologische Revue* 32 : 349-354.
- 2010 “Mechanistische Erklärung und die Anatomie des Sozialen. Bemerkungen zum Forschungsprogramm der Analytischen Soziologie.” in Thomas Kron/Thomas Grund (Hrsg.) *Die Analytische Soziologie in der Diskussion.* s. 31-65.
- Maurer, Andrea/**Schmid, Michael** 2010 *Erklärende Soziologie. Grundlagen, Vertreter und Anwendungsfelder eines soziologischen Forschungsprogramms.* Wiesbaden : VS Verlag.
- Müller, Hans-Peter/**Schmid, Michael** (Hrsg.) 1998 *Norm, Herrschaft und Vertrauen. Beiträge zu James S. Colemans Grundlagen der Sozialtheorie.* Opladen : Westdeutscher Verlag.